

キリスト教的な世界観と  
科学的世界観  
——地球はいかなる場所か

京都大学文学研究科  
芦名定道

## 1 問題

わたくしは、この 15 年ほどの間、「宗教と科学」（キリスト教と自然科学）の関係論——「宗教と科学」関係史（ニュートン主義の自然神学、進化論論争、心脳問題など）、「宗教と科学」新たな関係構築の基礎論（形而上学再考）、科学技術の倫理的問題（生命と環境の問題）とキリスト教——を主要な研究テーマの一つとしてきました。その意味で、「宗教と科学がそれぞれ宇宙や自然、生態、人間社会をデザインし、意味づける際の思考様式の違いや相補的關係を探る」という本シンポジウムの問題設定は、わたくし自身の研究テーマと密接に関連しており、こうして話をする機会を与えていただいたことについて、感謝申し上げます。

以下の発題では、現代の宗教研究、とくにキリスト教思想研究の立場から与えられた課題へアプローチすることになりますが、具体的は、次の 4 つの問題（論点）について、順次考察を加えるという仕方で、話を進めることにいたしますので、お手元のレジュメをご参照いただきながら、お聞きください。

問題 1 . 世界の宗教は極めて多様であるが、洋の東西を問わず、近代化以前の宗教的な諸伝統においては、基本的に類似した世界観を見いだすことができる（宗教現象学の成果→神話論的世界観）。これをキリスト教に関して、確認する。

問題 2 . 近代の科学的世界観は何をもたらしたか。西洋キリスト教世界において、コペルニクス、ケプラー、ガリレオ、ニュートンら近代科学の英雄たちは、天動説から地動説へ、有限な世界から無限な宇宙への転換をもたらしたが、現代人が描く地球観・地球像は、こうした転換を経て形成された。

問題 3 . 近代的地球観が、キリスト教に何をもたらし（進化論の場合）、それに対して、キリスト教思想（神学）はいかなる対応を行ったのか。ここでは、ブルトマンの非神話論

化（キリスト教信仰と神話論的世界観の分離）を紹介したい。

問題4．宗教（キリスト教）は科学的地球観に対していかなる積極的な関係を構築しうるのか。

## 2 キリスト教と伝統的世界観

伝統的な諸宗教は、古代以来、そのときどきの世界観と結びつきながら、それぞれの宗教思想を展開してきました。これから行われるほかのパネラーの方々による発題からもおそろくわかるように、人類が形成してきた宗教的世界像はきわめて多様であって、その内容を単純に図式化することは困難です。しかし他方、19世紀末ごろから多くの実証的研究を蓄積してきている現代宗教学、とくに宗教史学と宗教現象学は、この一見すると混沌とした諸宗教の伝統の中に、基本的な類似性が存在することを明らかにしてきました。それは、宗教現象学者エリアーデの定式を借りるならば、世界はその中心軸（聖なるものが顕現する世界の中心）によって貫かれた、天と地上と地下の三層構造（神々—人間—死者）を成している、との世界像（三層構造の伝統的世界像）です（京都大学オープンコースウェアにアップしている、わたくしの「キリスト教学への招待」の講義ノートをご参照ください）。このような観点から確認できる宗教的諸伝統の共通性は、近代的な科学的世界像と対比するとき、特に明瞭になるように思われます。

次にこの三層構造の世界観を、古代キリスト教において確認して見ましょう。もちろん、三層構造世界観といっても、時代によって様々な変化が認められます——一口に古代と言っても、その範囲は数千年にわたっており、当然世界像も変化するわけです——。たとえば、キリスト教の源泉である古代イスラエル民族の世界像において、少なくともその原型に即して言うならば、三層構造の第三番目の層である「地下」

のイメージは漠然とした状態にとどまっており、いわば世界像の背後に退いているように見えます。ヘブライ語聖書（キリスト教の伝統的言い方では、旧約聖書ですが）の冒頭において、「初めに、神は天地を創造された」（創世記 1 章 1 節）とされているように、神が創造した世界（万物）に含まれるのは、「天と地」の二層に他なりません——この点で、古代イスラエル宗教は現世中心的である、と評する研究者も存在します——。

ヘブライ語聖書より、もう一つの例を引用してみましょう。

「28:10 ヤコブはベエル・シェバを立ってハランへ向かった。11 とある場所に来たとき、日が沈んだので、そこで一夜を過ごすことにした。ヤコブはその場所にあった石を一つ取って枕にして、その場所に横たわった。12 すると、彼は夢を見た。先端が天まで達する階段が地に向かって伸びており、しかも、神の御使いたちがそれを上ったり下ったりしていた。……16 ヤコブは眠りから覚めて言った。『まことに主がこの場所におられるのに、わたしは知らなかった。』17 そして、恐れおののいて言った。『ここは、なんと畏れ多い場所だろう。これはまさしく神の家である。そうだ、ここは天の門だ。』」（創世記 28 章）

ヤコブが見たこの不思議な夢の話は、「天と地」の二層（二つの平面）を繋ぐ、世界の中心軸（エリアーデの言う世界軸）に関わるものであり、ヤコブの眠りについてた場所が、世界の中心（神の家、天の門）であることを物語っています。

しかし、時代が下るに従って、地下のイメージが次第に大きく膨らんで行きます（これには、個人の死後の運命が問題として顕在化したことが関連するのかもしれませんが）。イエスの宗教運動においても、古代イスラエ尔的な現世中心的態

度を確認することができますが、キリスト教においては、次第に死後に関わる議論が重要性を増して行き、中世において豊かに開花する死後・地下の多様なイメージを生み出すことになります。

したがって、キリスト教的世界観の基本を論じるには、後の複雑化した議論よりも、その原型になった、古代キリスト教的世界観について考えるのが適当でしょう。そのために、ここで取り上げたいと思うのは、キリスト教信仰のエッセンスを表現したものとして古代から現代まで、キリスト教諸教派において尊重されている「使徒信条」(Symbolum Apostolicum、この言葉は4世紀には確認できますが)です。まず、日本語訳でその全文を確認してみましょう。

#### <使徒信条>

わたしは、天地の造り主、全能の父である神を信じます。

わたしはそのひとり子、わたしたちの主、イエス・キリストを信じます。

主は聖霊によってやどり、おとめマリアより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとで 苦しみを受け、十字架につけられ、死んで葬られ、よみにくだり、三日目に死人のうちからよみがえり、天にのぼられました。そして全能の父である神の右に座しておられます。そこからこられて、生きている者と死んでいる者とをさばかれます。

わたしは聖霊を信じます。

きよい共同の教会、聖徒の交わり、罪のゆるし、からだのよみがえり、永遠のいのちを信じます。

とくに、注目いただきたいのは、「イエス・キリスト」の部分ですが、そこに描かれたイエス・キリストの動きをまとめれば、次のようになります。

まず、父なる神のひとり子（主、キリスト）は、ナザレのイエスという歴史上の人物としてこの世界に誕生したと語られています（これが、キリスト教の言うキリストの「受肉」です）、これは、キリストが「天」から「地上」に移動したことを意味します。受肉以前のキリストの存在形態については、「神のひとり子」という言葉からも伺えるように、天的存在者がイメージされており、これは、有名な「先在のロゴス＝キリスト」という教説（キリストはロゴスとして、父なる神による天地創造以前に存在し、天地創造に関与した、という教義）として展開されました。この天的存在者であるキリストが、天の層から地上の層に移動したわけであり、これが、クリスマスの出来事の意味するところでは、イエスは地上で生活し（30年あまり）、最後に十字架上で死を迎えますが、「使徒信条」では、イエスは墓に「葬られ」た後に、「よみ」に下ったと語られます。これは、地上の層から地下の層への移動とあってよいでしょう。これに関連して、キリストは地下の層において死者の救済に携わったという説も存在します。ともかくも、キリストは第三の層である「地下」へ移動しました。その三日目に、キリストは復活し、地下から再度地上に移動し、その後しばらく地上に留まった後、「天にのぼられました」とあるように、最終的には地上から天に移動して、現在に至っていると考えられるわけです（将来の再臨において、キリストは再び天から地上に移動することが期待されています）。

以上が、「天一地上一地下」の三層におけるキリストの動きの全体です。こうした神話論をどのように評価するかは別にして（この評価は、次の「3」で論じる問題に関連することになります）、ここで確認すべきは、キリスト教が、多くの宗教的な諸伝統と同様に、三層構造世界観を前提とし、この枠組みに基づいて、自らの信仰内容を表現しているという

点です。中心によって規定され三つの層から構成された世界、これが、キリスト教の伝統的な世界像であって、そこに近代的な地球観が存在しないのは明らかです。

### 3 近代における世界観の変容とキリスト教思想

近代の科学的世界観（地球観）の登場は、以上のような諸宗教が前提としてきた世界観に大きな変更を迫り、宗教思想にも少なからぬ影響を及ぼすこととなります。キリスト教的世界観の変遷はまさにこうした事例の典型と言えるでしょう。

そこで次に、キリスト教思想史の文脈からではありますが、近代的な世界像が何をもたらしたかについて、考察を行うことにしたいと思います。

わたしたち人類が「地球」の上に生存しているということは、近代以降そうなったということではなく、それを認識しているか否かに関わらず、古今東西、常にそうであったことについては、誰も反論できないでしょう。しかし、現代人がイメージするわたしたちの「地球」、つまり現代人の地球観は、近代の、とくに近代科学の産物であることもまた事実であって、確認を要する問題であるように思われます。もし、近代の科学的地球観の意味で「地球」という言葉を用いるとするならば、近代以前の多くの人類にとって、「地球」は存在しなかったと言わざるを得ません。

先に論じた伝統的な諸宗教の世界観とこの近代的地球観とを対比するならば、一方では、地球（正確には世界の中心軸と地上平面との交点）という場所を中心として、上には天、下には地下という二平面に挟まれた有限の地上世界がイメージされており、他方では、中心が存在しない無限宇宙の片隅で、自ら自転を行いつつ太陽の周りを公転する地球がイメー

ジされることとなります。こうして、伝統的世界観から近代的世界観への転換は、有限から無限へ、平面から球体へ、そして中心喪失と特徴付けることが可能となります。

この世界観の大転換が、近代初頭の人間に大きな衝撃をもって体験されたことは、沈黙の無限宇宙の中で戦慄を感じたパスカルが語るとおりです。すなわち、

「人間の盲目ぶりと惨めさを見、沈黙の大宇宙をながめ、人間がなんの光もなく、ただひとり放り出され、この宇宙の片隅に迷いこんだように、だれが自分をここへ置いたのか、自分は何をして来たのか、死んだらどうなるのかもわからず、何を知ることにも不可能なさまを見つめると、わたしはぞうっとしてくる。」（田辺保訳『パンセ』693）

もちろん、こうした近代科学がもたらした世界観の転換が、多くの人々の日常感覚を支配するようにはかなり時間が必要でした。科学的知と日常感覚との間には、常にギャップが存在しているのです。しかしともかくも、ニュートン力学に結実する近代の科学的知（17世紀の科学革命の成果）は、いわゆる地理上の発見とそれが引き起こした大航海時代を背景に、球体としての地上（つまり地球）という西欧的近代の世界観を、地球上に生きる多くの人類にとっての共通の日常的なリアリティとして定着して行くことになりました。それによって、キリスト教も自らの伝統的な世界観をラディカルに転換せざるをえない状況に直面したわけであり、このラディカルな転換を受け入れることは、必ずしも平坦な道ではなかったのです。

キリスト教が近代的な世界観にどう対処したかについては、進化論を例に取れば、わかりやすいかもしれません。なぜなら、進化論は人間とほかの生命体との連続性を進化のプ



ロセスとして描き出すことによって、生命世界における人間の中心的位置に動揺を加え、近代的世界観がもたらした人間の脱中心化プロセスを完成したものと解釈できるからです（脱中心化の完成体としての進化論）。

近代科学とキリスト教との関わりは、わたくしが長年取り組んできた研究テーマですが、科学と宗教との関係は、決して単純でないことに留意いただく必要があります。ガリレオ裁判や進化論論争（アメリカにおける創造論者と進化論者の対立）によって、多くの現代の日本人は、宗教と科学の関係を対立図式によってイメージしているように思われますが、これは事態の一面に過ぎません。このことは、そもそも、ケプラーからガリレオ、そしてニュートンに至るまでの、17世紀の科学革命の主役たちのほとんどが明確なキリスト教信仰の持ち主であったこと、さらにはキリスト教信仰と近代科学の内的連関を主張する有力な学説（マートン・テーゼ）が存在することなどから、明白です。ガリレオ裁判が、宗教と科学の対立の事例として適当ではないことは、近年のガリレオ研究の成果が示すとおりであり、また、コペルニクスの地動説が聖書と矛盾なく解釈可能であることは、コペルニクスの直弟子で地動説の擁護論（16世紀前半の執筆と推定）を展開したレティクスの次の主張から明らかです。少し長くなりますが、引用してみましよう。

「天体现象の首尾一貫した説明を得るために地球の運動が仮定されるべきであることは、数学的にいって確かである。しかし、この問題にかんし、聖書にしたがえばなにが主張されるべきであろうか？」（レティクス「[聖書と]地球の運動にかんする作者不明の論考」、R.ホーイカース著『最初のコペルニクス体系擁護論』高橋憲一訳、すぐ書房、1995年、56頁）

「聖書が一般に受け入れられている語り口をつかっているのは周知のことであって、いまさら証明する必要はない。したがって明らかに、聖書からひき出された太陽の運動にかんする幾多の記述をわれわれはどれほど主張しようと、聖アウグスティヌスによって定められた限界をけっして踏み越えることなく、また、なにか不都合な帰結が出てしまうようなことを導入することなく、これらは太陽の見掛けの運動のことをいっていると理解すべきである。したがって、われわれを反論しているように思われる、太陽の運動にかんする聖書のあのテキストは、天文学の最近の再興で最良の検証を受けた諸結果と、矛盾していることにはならないであろう。」（同書、133頁）

このレティクスの議論の要点は、聖書テキストとは、専門的な科学者にために書かれた科学文献（あるいは科学の教科書）ではなく、むしろ一般的な読者に読まれる（正確には、聞かれる）ことを意図した信仰的文書であって、その記述方法（語り口）は、古代人一般の世界観において理解可能な仕方になされていること（この語り口は、現代人が日常的に行う言語表現にも受け継がれています。「日が昇る」。）、したがって、聖書が描く太陽の運動は、古代人にそれがどのように見えたかという見掛け上の運動様態（天動説）に合致しているということです。聖書テキストがこうした基本的特性を有していることは、中世の聖書解釈においても広く受け入れられた了解事項であって、そこから容易にわかるように、聖書的世界観を地動説に合わせて解釈することはそれほど困難ではなかったのです（では、ガリレオ裁判は何であったのか）。

また、進化論と創造論が両立可能であることは、ダーウィンの進化論が登場した19世紀半ば以来、少なからぬキリスト

教思想家が主張してきた議論であり、この状況は今日のキリスト教思想でも変わりありません。実に、ダーウィン自身、決して無神論者なわけではないのです。

以上のように、キリスト教信仰と近代自然科学の知との両立可能性については、様々な論拠を持ち出すことができるわけですが、しかし、同時に19世紀末以来、宗教と科学の対立図式が、広く一般化しており、アメリカにおける進化論論争に象徴される対立状況が存在していることも否定できません。こうした状況の中で、20世紀のキリスト教思想を代表する神学者たち（特にプロテスタントの伝統的教派の神学を代表する思想家たち）の間には、この対立状況の深刻さを意識することによって、両立（同一化）と対立のいずれでもない、第三の可能性を追求する傾向が顕著に見られるようになりました。次に、この第三の可能性を追求する神学思想のうちから、世界観・地球観という観点で注目すべき議論として、ブルトマンの非神話論化(Entmythologisierung)を取り上げることにはしたいと思います。

ブルトマンは、20世紀を代表する新約聖書学者として著名な人物ですが、キリスト教信仰と科学的世界観の対立という問題に対して、キリスト教信仰を世界観一般から分離するという戦略を採用しました。これが非神話論化の意味するところです。

先に「使徒信条」を実例として、古代のキリスト教信仰が三層構造世界像の枠組みにおいて展開していることを確認しましたが、この三層構造世界像について、ブルトマンはそれを神話論と規定し、次のようにその非神話論化を主張します。すなわち、ブルトマンの非神話論化の論理に従えば、キリスト教信仰の内実は、古代的であろうと近代的であろうと世界観という形式から分離して表現することが可能なのであって（したがって、古代の神話論からも分離可能なわけです）、

もし、キリスト教信仰が近代科学の世界観・地球観との対立を原理的に回避しようとするならば――ブルトマンにとっては、それは厳密には対立回避の便宜的手段ではなく、信仰とは本来世界像に制約されないと考えられているわけですが――、この分離を断固遂行すべきである、と主張されるのです。

では、この非神話論化され世界像一般から分離した信仰とはいかなるものなのでしょうか。これに関しては、ブルトマンが聖書の実存論的解釈と呼ぶ議論を参照する必要がありますが、ここでは、ブルトマンから離れて、実質的には非神話論化に相当する近代キリスト教神学の試みを紹介することにしたいと思います。

キリスト教信仰は、進化論登場以前より、近代的知との間で様々な軋轢を経験してきました。その最大のものの一つは啓蒙思想とリンクした実証主義的科学とその影響下で展開された様々なタイプの無神論です。こうした軋轢を回避するために取られたのが、実は、キリスト教信仰を世界像から分離し、専ら人間の倫理的な実践との関係で意味づけようとする一連の試みだったのです。近代的市民に相応しい人間の生き方を聖書に求めるという議論、聖書の神の国という表象を近代社会の進歩の延長上にイメージしようという試み、宗教は人間の内面性の問題であるとの宗教理解、これら様々なキリスト教思想の近代的な試みを哲学的な自覚に立って洗練した仕方で遂行したのが、ブルトマンの非神話論化だったのです。このような、キリスト教と世界観一般との分離に基づく、キリスト教的信仰と近代的な世界像（近代科学）や古代の神話論との分離というキリスト教思想の動向は、近代以降のキリスト教が置かれた問題状況において、かなりの広がりをもっていることがわかります。

最近、「無神論者」宣言を公表して物議を醸しているオランダ・プロテスタント教会（PKN）のクラアス・ヘンドリ

クセ牧師は、インターネット上の情報によれば、次のように語っています。

「神は、私にとって、存在ではなく、人々の間で起こり得ることのための言葉である。例えば、誰かがあなたに『私はあなたを見捨てない』と言い、そしてその言葉が実現する。その“関係”を神と呼ぶことに全く問題はない。」

こうしたキリスト教信仰の理解に立つならば、神の存在にすらこだわる必要がないのですから、まして、信仰を特定の世界像によって表現しなければならない理由などどこにも存在しないことになります。したがって、こうした立場に立つ限り、キリスト教信仰は近代的な科学的世界観と対立することなどあり得ない、これが結論です。

#### 4 展望——新しい可能性を求めて

以上の考察によって、わたくしの発題の冒頭に掲げた4つの問題の内、最初の3つについてはある程度明らかにすることが出来たと思います。古代のキリスト教的世界像が三層構造の世界像であったこと、近代科学の世界像がこの伝統的な宗教的世界像を転換しつつ成立し、現代人の世界像としてその妥当性が広く承認されていること、そして近代以降のキリスト教思想においては、近代的な世界像に対して、両立と対立、そして分離の三つの立場が存在していること、以上の三点です。

では最後に、現代のキリスト教思想にとっての世界観の意義と、それをめぐる別の新たな思想的取り組み、つまり宗教と現代科学との関係性をめぐるもう一つの可能性について考察を行うことによって、わたくしの発題の締めくくりにした

いと思います。

キリスト教思想は、現在実に様々なテーマのもとで展開されていますが、宗教と科学の関係論はその主要テーマの一つであり、1970年代以降、欧米のキリスト教思想研究におけるこのテーマへの取り組みは、きわめて盛んな状況にあります（日本では必ずしもそうになっていないのですが、これは日本と欧米における知的状況の違いと言えます）。こうした研究状況の背後には、宗教者も科学者も含めた、人類全体が共有する危機意識が存在しているといつて良いでしょう。1970年代ごろから意識されるようになった科学技術をめぐる倫理的な諸問題の深刻さに対して、これまでの宗教と科学の関係理解（とくに、対立や分離の議論）では対処できないという意識です。

ここに、宗教と科学の新しい関係構築の必要性が指摘されることになるのですが、以上の状況が最近のキリスト教研究をかなりの程度規定していると言ってよいでしょう。倫理的諸問題の中で、しばしば典型的な問題として挙げられるのは、深刻な環境危機ですが、この環境危機に直面して、宗教と科学は対立や分離を超えて協力することが必要ではないのか、このことが現在のキリスト教思想研究でも問われているのです。もちろん、こうした背景からなされるキリスト教思想研究と言っても、それは多岐にわたっており、その全貌を紹介することは容易ではありません。ここでは、本日のテーマである世界観・地球観という問題との関連で、若干の指摘を行ってみたいと思います。

環境について考え行動する際に重要なものの一つは、多くの人々が共有する日常性（日常的な意識や実践）ではないでしょうか。この日常性が変わらない限り、おそらくどのような環境思想や環境技術をもってしても、十分な効果を発揮することは困難なように思われます。もし、環境問題との関わ

りで、宗教と科学との新しい関係構築について考えるとすれば、その場合、「日常性を共有しそれとの関係において緩やかにつながった宗教と科学」とでも言うべきものが問題になるのではないのでしょうか。そして、宗教と科学との関係づけが可能になるためには、一方で特定の世界観との独占的結びつきから宗教を分離すると共に（この点でブルトマンの議論は一面の真理性を有しています）、科学との接点となる日常性との結びつきを回復する必要があります。宗教が宗教であるために、日常性への埋没を避けねばならないことは、ある意味当然であるとはいえ、日常性から遊離するだけの宗教では、日常性の歪みを正すことも、日常的リアリティの批判的構築に積極的に寄与することもできません。ここで問われているのは、日常性、科学、宗教の三者の結びつきであり、これを可能にするものが、世界観・地球観なのです。こうして宗教と科学との新しい関係構築にとって、世界観が決定的に重要な位置を占めていることがわかります。

日常性を共有し共通の世界観において緩やかにつながった宗教と科学は、まさに、相補的な関係を結ぶことが可能になります。環境危機の原因を解明しその解決のために技術的な手段を提示することは当然「科学」の役割になりますが、多くの人々の中に環境的感性（環境に優しい生き方に価値を見出す態度）を目覚めさせそれを養うことにおいて、「宗教」の果たすべき役割は決して小さくないはずです（狭い意味での宗教だけがこの役割を果たすと言う必要はありませんが）。宗教は、人々の感覚・感性に直接訴えかけることによって、環境に優しい行動へと向かうように人々の動機付けを強化することができるからです。こうした相補的な役割を果たすには、宗教者も科学者も、一つの世界・地球に生を受け、その中で生きているとの自覚を共有することが重要であり、それには、日常性を基盤とした世界観の共有が不可欠になるので

はないでしょうか。

宗教は、ブルトマンが述べたように、特定の世界観の拘束から自由になることを必要とする、しかしそれと同時に、日常的な世界観との関係性を必要とします。近代以降、この日常的な世界観を支えているのが科学的知であることを考えれば、最終的に、宗教は科学的世界観を離れることはできません。環境危機に対処しようとするとき、宗教者も問題状況の批判的理解のためには科学的知を必要としているのです。

同じ問題を、キリスト教以外の宗教や科学の立場から考えればどうなるでしょうか。後の活発な討論に期待したいと思います。

以上で、わたくしの発題を終わります。ご清聴、ありがとうございました。